

極東先史土器の一考察

——遼東半島を中心として——

小 川 静 夫

(1)

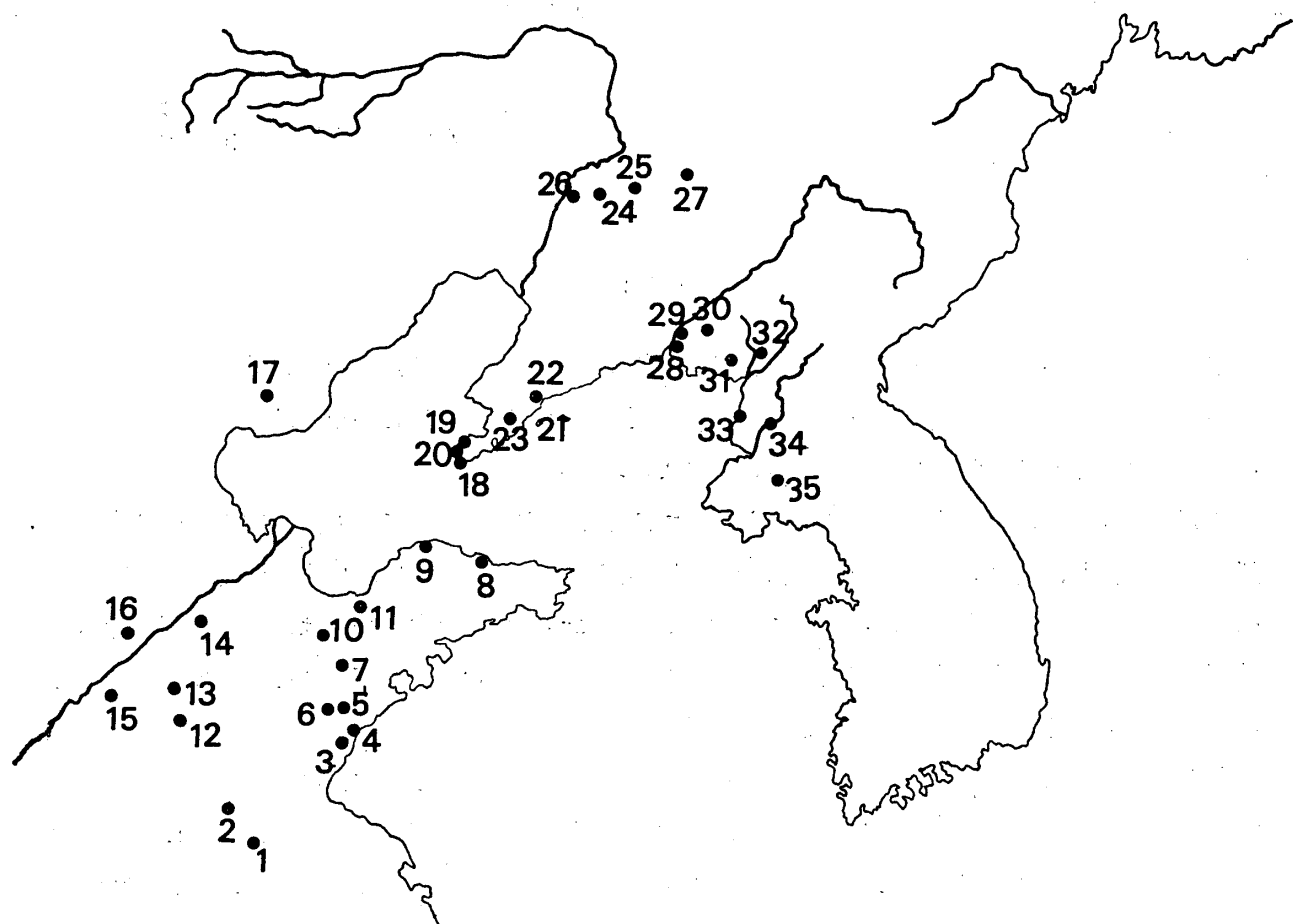
本論は従来シベリアとの関連で捉えられてきた極東の先史文化を最近急速に進歩した中国との対比から検討しようとするものである。これは中国東北地方、朝鮮半島と山東半島をつなぐ遼東半島の様相がようやく明らかになりつつあることによる。

新石器時代の中国東北地方南部は東方と西方ではやや様相を異にしており、東方の一群は東北朝鮮やソ連沿海州、沿アムールの一群と密接な関連がある。これらの地域は極東先史文化を考究するに際し、重要な位置を占めているが、ここではこれらについて言及する余裕はない。新石器時代、前期青銅器時代の遼寧省瀋陽周辺及び西北朝鮮と山東半島との関係を遼東半島を介して考えて、その序章としておく。

さて、この様な研究は朝鮮民主主義人民共和国（以下「共和国」と略す）の研究者によって以前から進められていた。「共和国」の研究者は朝鮮の新石器時代、青銅器時代の年代観を1960年代半ばに大きく変更した（文51, 64）。それ以前の新石器時代の年代観（文62, 63）では新石器時代を前二千年から前一千頃と見做していたが、新たに上限を前五千年紀、下限を前二千年紀とされた。この背景として、1963年から1965年に実施された中国東北地方に於ける中朝合同調査が重要な役割を果たしたと思われる。1966年にはこの報告書として、「共和国」側から『中国東北地方の遺跡発掘報告』（文61）が刊行されている。続いて、1967, 69年にこの成果を基にして、同題の「紀元前一千紀前半紀の古朝鮮文化」（文55, 58）が相次いで発表され、その中で紀元前二千年紀から前一千紀の朝鮮と周辺地域との関連を論じている。「共和国」側の最新の集大成として、『朝鮮考古学概要』（文57）、『朝鮮全史1』（文59）があるが、見解そのものは殆ど変わっていない（表—1）。

「共和国」側の年代観の論拠となっているものの中には首肯しかねる点があり、個々の遺跡の位置付にも疑問の点が無い訳ではない。にもかかわらず、その年代観は大略妥当であろうと思われる。翻って、当時の周辺地域の研究段階を考えれば驚かざるをえない。

遼東半島、山東省の編年作業が飛躍的に進展したのは最近であり、これらを踏まえて、以下「共和国」側の見解を検討したい。



関連遺跡分布図

1. 花庁村 2. 大墩子 3. 東海峪 4. 両城鎮 5. 呈子 6. 前寨 7. 景子鎮 8. 丘家庄 9. 紫刑山
10. 姚官庄 11. 東岳石村 12. 尹家城 13. 大汶口 14. 城子崖 15. 青固堆 16. 尚庄 17. 大城山
18. 老鉄山, 將軍山, 郭家村, 牧羊城, 尹家村 19. 双砬子, 四平山, 崗上墓, 楼上墓 20. 大台山, 羊頭窪
21. 長海県の諸遺跡 22. 貔子窩, 高麗寨 23. 望海塌 24. 新楽, 肇工街 25. 大灰仿 26. 偏堡
27. 門臉 28. 双鶴里 29. 新岩里 30. 美松里 31. 堂山 32. 細竹里 33. 弓山 34. 清湖里, 金灘里
35. 智塔里

極東先史土器の一考察

表一 西北朝鮮及び周辺の編年(文献 57.58 より作成)

	前四千年紀 後半	前三千年紀 前半	前三千年紀後半 ~前二千年紀初	前二千年紀 前半	前二千年紀後半 ~前一千紀初	前一千紀 前半
	新 石 器 時 代			青 銅 器 時 代		
遼 東 半 島	沙 泡 子 南 玉 屯	呉家村 姚家溝 双砬子1 上馬石下層	姚家溝 双砬子1	单砬子 双砬子2 將軍山	羊頭窪 双砬子3 大台山	崗上墓
西 北 朝 鮮		美松里下層 堂 山	新岩里1 双鶴里2		新岩里2	美松里上層
西 朝 鮮	弓山1	弓山2. 3 (金灘里1)	弓山4 (金灘里2)			コマ形土器
瀋 陽 周 辺	肇工街下層					

(2)

山東省は中国の新石器時代では最も編年体系の整備された地域の一つである。大きく大汶口に先行する文化、大汶口文化、竜山文化、岳石文化(類型)¹⁾に分かれる。大汶口以前は未だ不明の点が多いが、磁山、裴李崗文化に類似する要素を持つ(文27)。大汶口文化については種々の編年があるが、ここでは嚴文明(文8)による八期区分に従う(図1)²⁾。山東竜山文化は大汶口文化と連続性が強い。

表一 山東竜山文化の編年

後		三期	M2100	主要遺物
中	上層	二期	M2124	
前	中層	一期		
	東海峪	呈子	三里河	姚官庄

山東竜山文化については黎家芳・高広仁(文49)、高広仁・邵望平(文12)による編年がある(表一2)。

三里河M2124(文21)は呈子(文23)2期から3期の一部に対比されている。呈子3期のM15の土器(図2-16~20)は3期の他の墓壙出土土器とは異質であり、2期に近い様相を呈し

ており、M2124に近いから妥当であろう。続く後期には呈子では3期の後に空白があり、三里河M2100、姚官庄がより遅れる様相を持つと考えられている。そして、M2100期とする両城鎮の鬻(ⅡC型)を呈子3期M32の鬻(図2-21)(ⅣA型)に後続させる(文11)。しかし、呈子3期には両城鎮に近い鬻(図2-3)(ⅡC型)もあり、それほど空白期があるとは思われない。逆に、呈子3期の細別を促す様にもとれる。今後の良好な資料を待ちたい。

ここでは山東竜山文化を諸城周辺の遺跡で代表させて、高等の如く、前期-呈子1期、中期-呈子2期、後期-呈子3期(及びより新しい一群?)の三期に分けて考えておく、但し、東海峪(文17)の層序については多少の疑問が残る。中層の鼎足は呈子1期の鼎足とは一致せず、3期のM15(図2-16)にある。又、上層の鳥首形鼎足は姚官庄(文64)、呈子3期(図2-32)にあり、両城鎮(文40)に特徴的である。他の器種(文17: 図版6-5, 6など)にも呈子3期に対比すべきものがある。

	規高	鼎(一)	鼎(二)	豆	背水壺	觚形杯	高足杯	彩陶	帶咀罐	角狀把	直筒杯	釜・缶工
一期												
二期												
三期												
四期												
五期												
六期												
七期												
八期												

図1 大汶口文化の編年(文献8)

1. 大汶口M13:12, 2. 大汶口M98:14, 3. 西夏侯M8:18, 4. 西夏侯M1:100, 5. 劉林M210:4, 6. 劉林M187:5, 7. 大墩子M20:1, 8. 大汶口M13:付6, 9. 大汶口M9:31, 10. 西夏侯M8:39, 11. 西夏侯M1:45, 12. 二澗村, 13. 劉林M210:3, 14. 大墩子M33:3, 15. 劉林127:2, 16. 青蓮崗, 17. 劉林M122:1, 18. 劉林M156:2, 19. 大墩子M7:2, 20. 大汶口M13:24, 21. 大汶口M9:2, 22. 西夏侯M8:10, 23. 西夏侯M1:10, 24. 大汶口M81:8, 25. 大汶口M98:13, 26. 西夏侯M8:11, 27. 西夏侯M1:50, 28. 劉林M218:1, 29. 劉林M83:1, 30. 劉林M74:4, 31. 西夏侯M1:102, 32. 青蓮崗, 33. 劉林M72:1, 34. 劉林M148:3, 35. 大汶口M23:2, 36. 大汶口M3:1, 37. 大汶口M24:5, 38. 大汶口M13:9, 39. 大汶口M9:6, 40. 西夏侯M8:20, 41. 西夏侯M1:80, 42. 大墩子H2, 43. 劉林M215:2, 44. 劉林M148:17, 45. 大汶口M59:1, 46. 大汶口M35:9, 47. 大汶口M47:40, 48. 大汶口M117:41, 49. 青蓮崗, 50. 劉林:192:1

極東先史土器の一考察

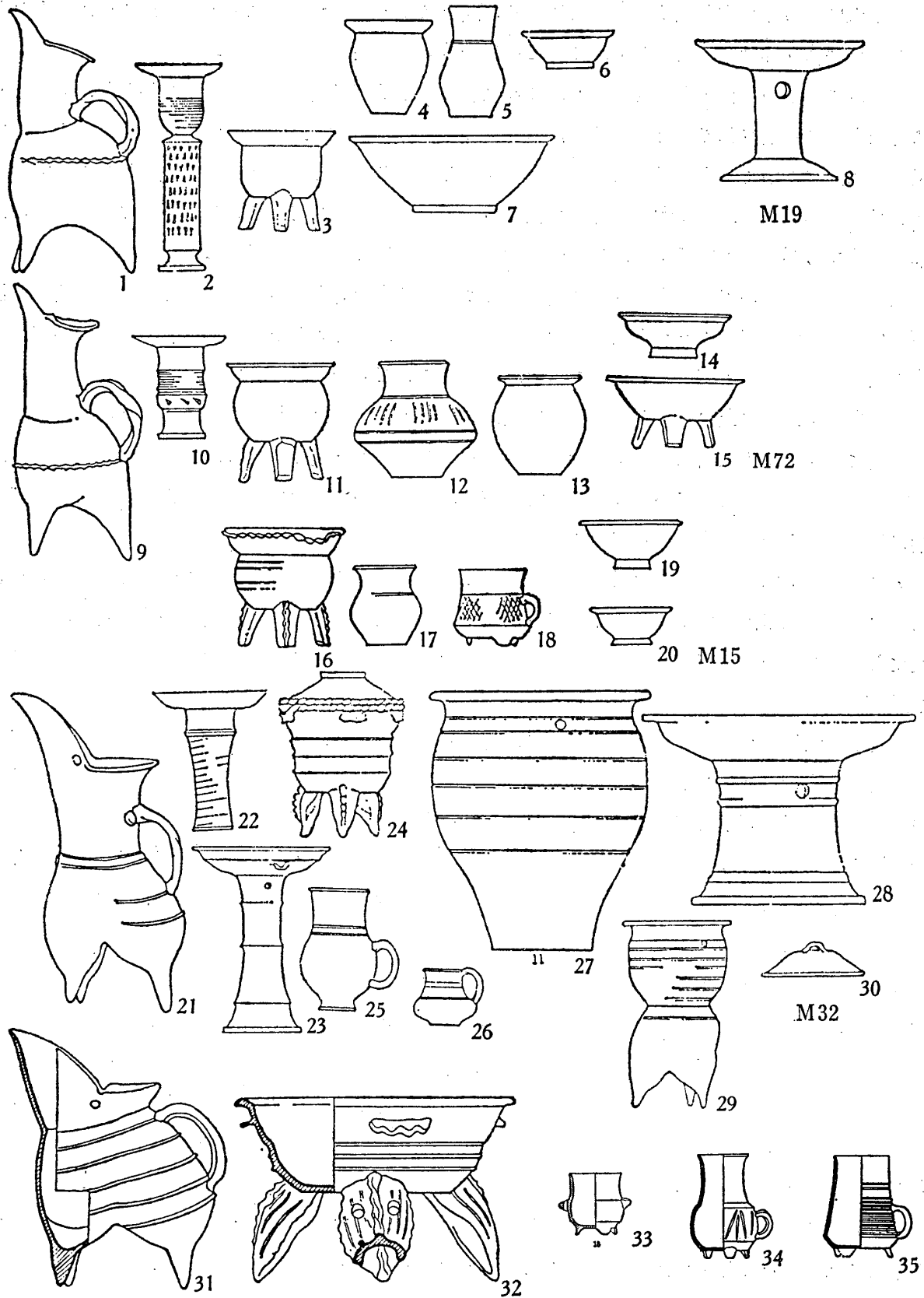


図2 呈子遺跡出土の土器 1期(1~8), 2期(9~15), 3期(16~35)(1/8)

並行条線による鋸齒文も呈子3期に共通する。或いは呈子M15を中期に入れた方がよいかもしれないが、東海峪は詳細が不明なので、ここでは呈子遺跡の分期に従っておく。

この後に、岳石文化がある(図-3)。これは戦後、東岳石村(文30)で初めて知られ、しばらくは竜山文化に包括されていたが、諸城前寨(文9)、尹家城(文20)での成果により、竜山文化に後続し二垂崗上層より古い段階であることが判明している(文49)。山東省及び江蘇省(文33)に分布が知られており、後述する如く、類例は遼東半島にも分布している。この時期には卵殻黒陶、鬻は失くなるが、甗は継承する。独特の紐付蓋(図3-18)、彩絵陶を伴う。

大汶口文化については嚴文明編年に従い、ここでは遼東半島との関連で注目される山東竜山、岳石文化段階について、より確実な年代を有する中原との対比を考える。即ち、河南の二里頭類型以降に並行する部分が山東竜山文化にあるのか否かについて若干検討したい。

高・邵(文12)は鬻の変遷から二里頭類型は山東竜山文化より遅れると考えている。

最近では竜山文化は河南、山東竜山文化と言う様な大別では既に律しきれず、小地域毎に類型が設定される様になってきている(文26, 37)。その間の相互の対比には未だ資料が不足しているが、鬻以外の土器の面から少し触れておく。

まず、山東竜山文化の下限は岳石文化によって規定されるので、岳石文化について検討しよう。前述の如く、二里崗上層に先行する事が判明している。嚴文明(文9)は夏代前後の夷人に属する文化と想定している。盛行する平行隆線や、三足器の特徴から、二里頭2期(文35, 36, 68)に最も近い。

一方、竜山後期が層位的に分かれる例に、河南省東部の王油坊遺跡(文21)上、下層、山東省西部の尚庄(文18)2, 3期がある。尚庄3期は同地域の青固堆類型(文10, 29)に相当する。器蓋の変遷からは尚庄3期(文18: 図六一-8)は王油坊下層に近い。王油坊上層は圈足盤(文21: 図一一-1)を手掛りとして大よそ媒山2期(二里頭1期比定)(文35: 図七一-10)頃に対比することができよう。従って、高・邵の分析と同様、尚庄3期、青固堆類型は殆ど二里頭類型と並行する余地が無いと思われる。

城子崖(文13)下層は尹家城1期に類似し、尚庄3期に近い。両城鎮も尚庄3期、城子崖下層に類似する。但し、これらは相互に地域差を有しており、これ以上の細別は難しい。

今、これと前述の岳石文化との関連を見れば、尚庄3期、王油坊下層、両城鎮などの器蓋は岳石文化の器蓋(図3-18)に近い。又、尚庄3期に見られる断面くの字様に屈曲させて隆帯状に作出する手法(18: 図八一-3)は岳石文化に連続的である。両城鎮にも口頸部が岳石文化に類似するもの(図3-10)がある⁹⁾。

以上の如く、山東竜山文化末期と岳石文化との間にそれほどの間隙があるとは考えられないので、山東省では大汶口文化から岳石文化まではほぼ連続的な推移を知ることができる。但し、遼東半島との関連で注目される山東半島東部の状況はよく分かっていない。丘家庄(文4)、紫刑山下層(文16)は西方の大汶口文化とはやや異なる様相を示している。又、この地域は文化的に遼東半島との

極東先史土器の一考察

図3 東岳石村遺跡
出土の土器 (1/8)

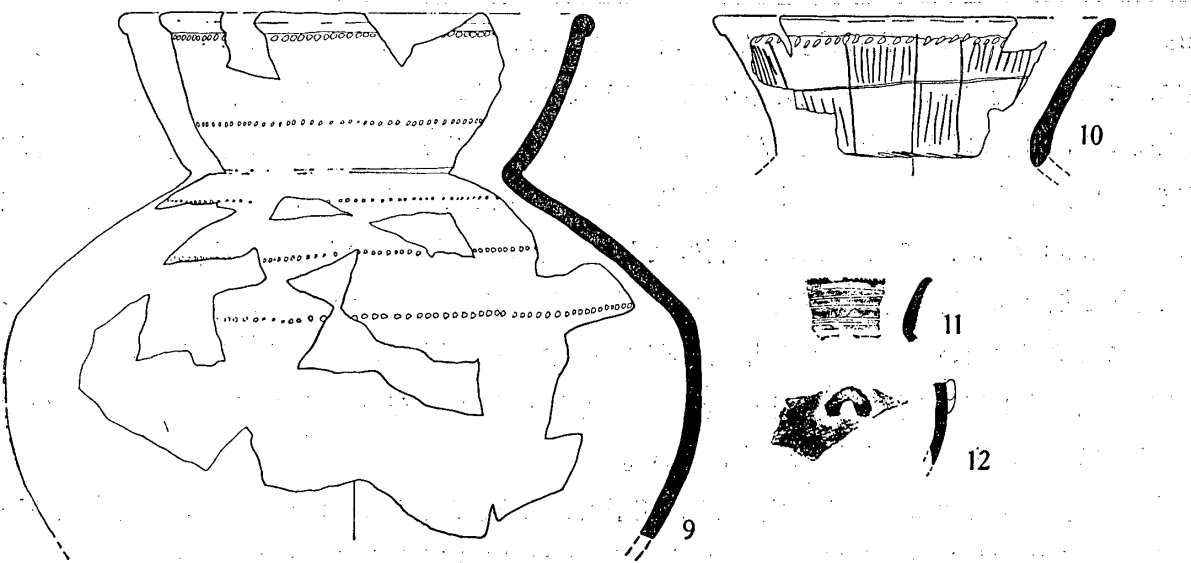
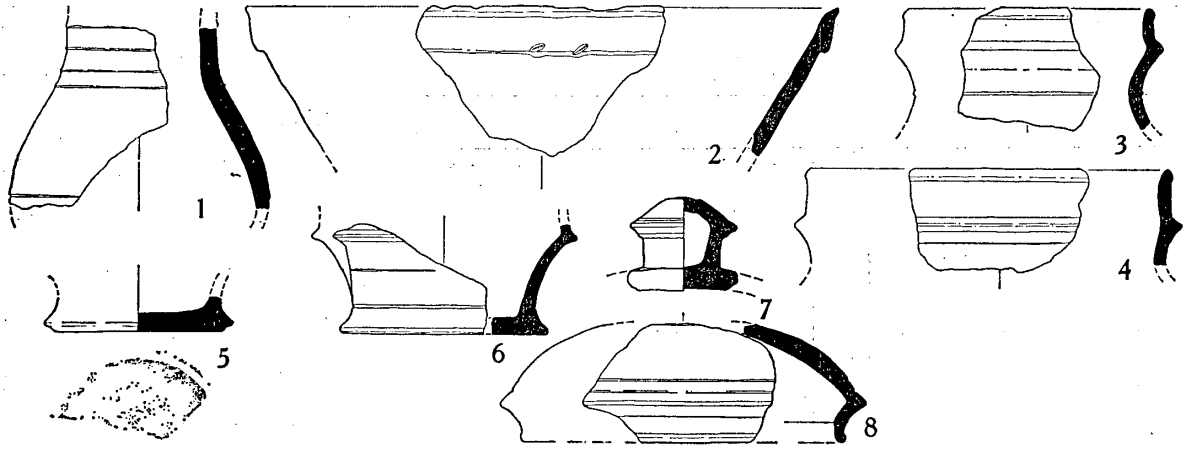
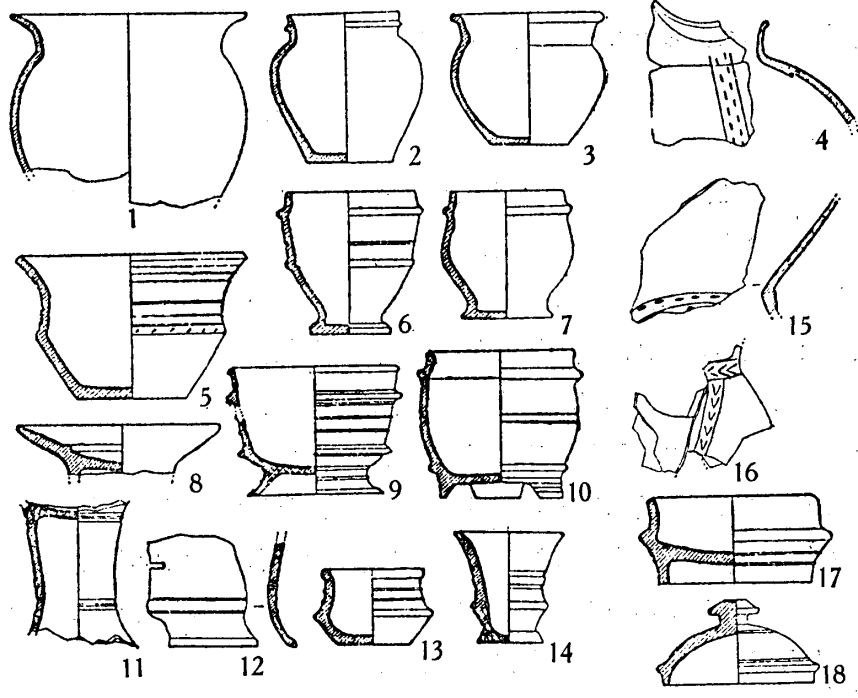


図4 双砵子積石塚 (1~8) 及び牧羊城 (9~12) 出土の土器 (1/4)

関係が緊密であったことが指摘されている(文27)。

(3)

遼東半島では、東亜考古学会による一連の調査報告(文71, 83, 84)の他、三宅俊成「長山列島先史時代の小調査」(文86)、及び澄田正一『中国先史文化』(78文)が戦後長らく基本的文献であった。1961年には佟柱臣による編年案が出されている(文31)。その後1963~65年の中朝合同調査で大きな成果が得られ、更に最近中国より重要な報告(文5, 42, 44)が相次いで出て来ている。合同調査では竜山並行期以降の基本的編年が確立され、後者の報告では新石器時代の編年が確立されたと共に、大汶口文化との並行関係が明らかにされたことが大きな成果として挙げられる。

遼東半島で層位的に出土している重要な遺跡としては西部(大連周辺)では郭家村(文5)、双砬子(文61)がある。中部(長山列島及び対岸の半島部)では小珠山(文44)と既に戦前に層位的な調査が行なわれていた上馬石がある。上馬石貝塚については戦前の調査(文78, 79)は未報告であり、以下は中国側の報告(文44)に拠る。

ここで、遼東半島の新石器時代から前期青銅器時代にかけての西部と中部の編年を層位的に出土

表-3 遼東半島の層位的出土例

西 部		中 部		
		小珠山 下層	上馬石 下層	
		小珠山 中層		
郭家村下層	$\left\{ \begin{array}{l} 5 \\ 4 \\ 3 \end{array} \right.$			
双砬子 1		$\left\{ \begin{array}{l} 2 \\ 1 \end{array} \right.$	小珠山 上層	上馬石 中層
双砬子 2				
双砬子 3			上馬石 上層	

した遺跡を代表として表-3に示しておく。

先ず、西部の状況から見てゆく。双砬子では第1期から第3期に層位的に三分されている。第1期は彩絵陶を伴う文化層である(図5-1~16)。第2期は戦前に報じられた積石塚出土資料(文69)(図4-1~8)と

ほぼ同様である(図5-17~26)。第3期は羊頭窪(文71)(図7-29~34)に最も近い(図9)。他に、これに後続する遼寧式銅剣を伴う墓が調査されている。郭家村貝塚では下層の5, 4, 3層と上層の1, 2層に分けられ、上層が既に著名な四平山(文79)(図6-23, 34)、老鉄山積石塚(文42, 81)(図6-25~36)に対比されている。戦前に鳥居龍蔵が報じた資料(文81)や、『牧羊城』(文83:挿図四)に紹介された資料は大よそ上層に相当するものと思われる。

双砬子1期と郭家村上層は両者共山東竜山文化の影響を色濃く受けた文化であるが、両者を同一に扱うことはできない。安志敏も両者を区別して考えている(文2)。両者の関係を知るには、各々が山東竜山文化の細別の何処に相当するのかが判明すればよいのだが、対応関係が明らかなのは四平山のみであり、別の方法をとらねばならない。

「共和国」の研究者は嘗って郭家村上層、四平山と双砬子1期との時期差を論じ、前者を双砬子2期と関連して言及した(文58)。この場合、後述の如く岳石文化と並行する双砬子2期と郭家村

極東先史土器の一考察

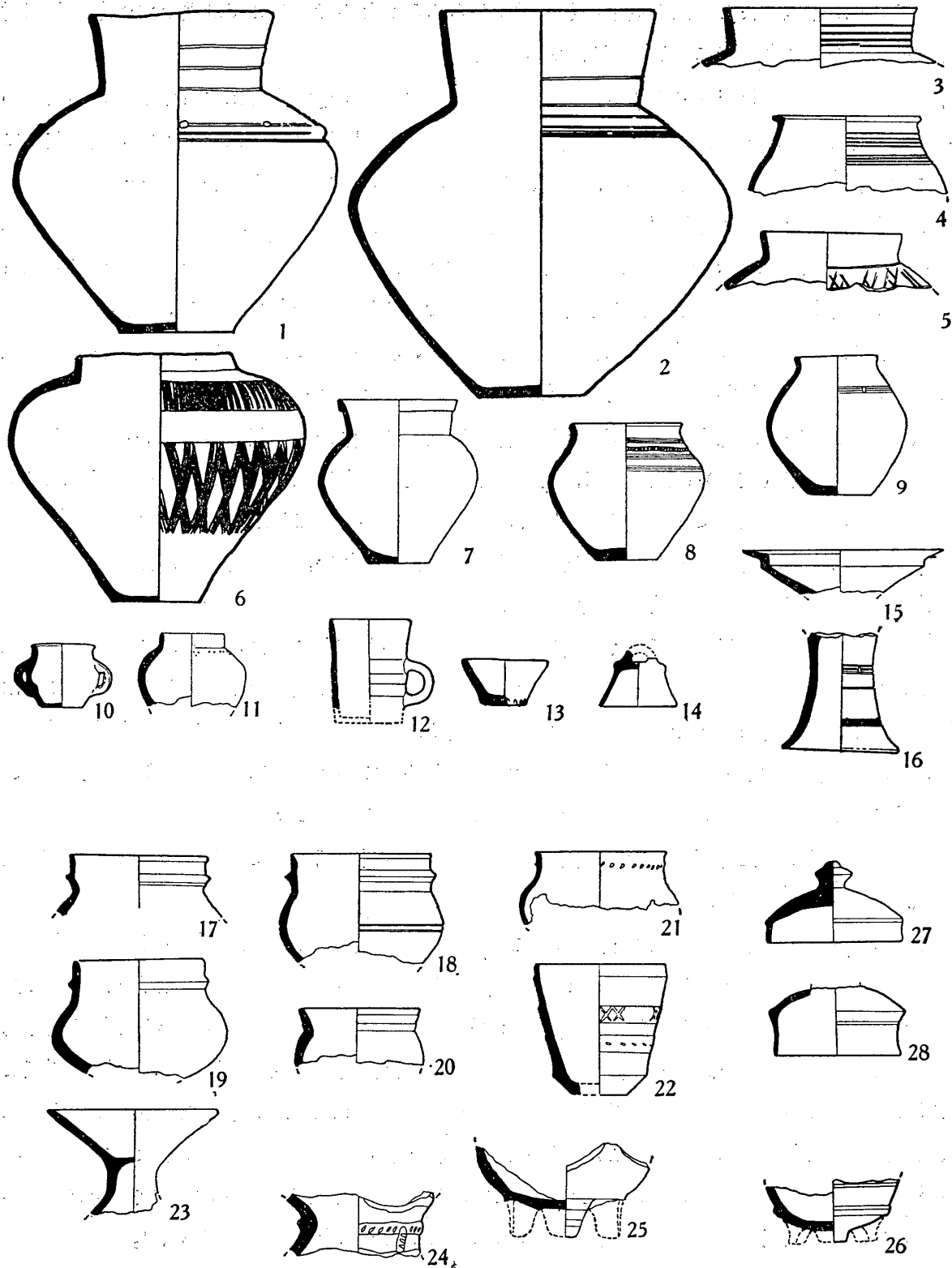


図5 双砵子遺跡出土の土器(1/8)

第1文化層(1~16)
第2文化層(17~26)

上層、四平山が分離されるのは山東半島との対比から明らかなので、ここで問題とすべきは郭家村上層が双砬子1、2期の間に入るか否かである。

当時の中国側の研究状況を考慮すると、漸く大汶口文化が山東竜山文化に先行することが明らかにされた段階である。大汶口文化に彩絵陶があり、山東竜山文化には伴わないので、山東竜山文化に並行する四平山より、彩絵陶を伴う双砬子1期が先行すると考えても無理は無い。今一つは、郭家村上層と双砬子1期を区別する指標となる「附加堆紋」が問題となろう。郭家村上層ではこの「附加堆紋」が多く、その上には種々の沈、刻線文が施される。これは大藩家屯(文81)、柏嵐子(文81)にも顕著である。郭家村上層に並行する中部の小珠山遺跡上層でもこれが約55%を占めている(文44)。一方、双砬子1期には二重口縁は少量で刻み目を施すものは無い。双砬子では二重口縁に刻み目を施す土器は2期以降に現われるから、郭家村上層を1期より遅れると考えたのはこの点からも無理がない。

他方、中国の許玉林、蘇小幸は郭家村上層に伴う卵殻黒陶、鬻が於家村下層に無いことから、尹達の竜山文化の編年(文3)に照らして、於家村下層が遅れると考えた(文5)。そして、遺跡の連続性の点で、郭家村上層で終わる遺跡が多く、於家村下層から始まる遺跡が多いと言う指摘をし、その傍証としている。於家村下層は未報告であるが、彩絵陶を伴い、郭家村上層に伴う鬻、卵殻黒陶、三足器を欠く点で双砬子1期に共通する特徴を示しており、大よそ双砬子1期に相当すると考えられる。従って、郭家村上層が古く、双砬子1期が新しいということになる。この中、許・蘇の扱った尹達の編年は現在から見れば地域差を無視したもので、又最近の出土例からも従うことはできない。しかし、岳石文化でも鬻及び卵殻黒陶が失くなり、山東竜山文化には無い彩絵陶が出現することから、於家村下層はより岳石文化に近い特徴を持っていることになる。但し、「附加堆紋」に関しては双砬子1期を介した場合、双砬子2期との連続性が問題となろう。

何れにしろ、近接した時期の所産と考えられ、基本的な資料が出揃っていない現状では俄かに決し難い。後に再び触れる所があろう。

遼東半島の彩絵陶の中、戦前の資料については三宅俊成(文87:91~110)による集成がある。戦後では双砬子1期に伴う彩絵陶(文61:그림12)が知られている。この中、単砬子(図7-1)(文84:図版第二九~三一)及び望海堦(文87:挿図四-20)の例が全形をうかがえる他は断片的であるため不詳の点が多い。しかし、文様構成の類似からはほぼ同時期(双砬子1期段階)の所産と考えてよさそうである。この場合、羊頭窪に伴う彩絵陶(文71:56)が問題になろう。この土器は羊頭窪に特徴的なものであり、混在とは見做しえない。必ずしも一時期に限定できないのかもしれないが、文様構成不明の為、これ以上立ち入らない。ここでは現在迄知られている文様構成の分かるものについては相互に類似しており、一時期の所産であろうことを確認しておく。

続く双砬子2期には積石塚出土資料の大部分が相当する。図4-1~8はその中の一部である。粘土帯の接合部を屈曲させて隆带状に作出する方法(図4-3, 4, 6)や、紐付器蓋(図4-7, 8)はこの時期に特徴的なものである。この時期に鬻が初めて出現するが、この鬻や三足器、他の器種も岳石文化と極めて類似している。岳石文化段階に山東半島と密接な関係があったことが知ら

極東先史土器の一考察

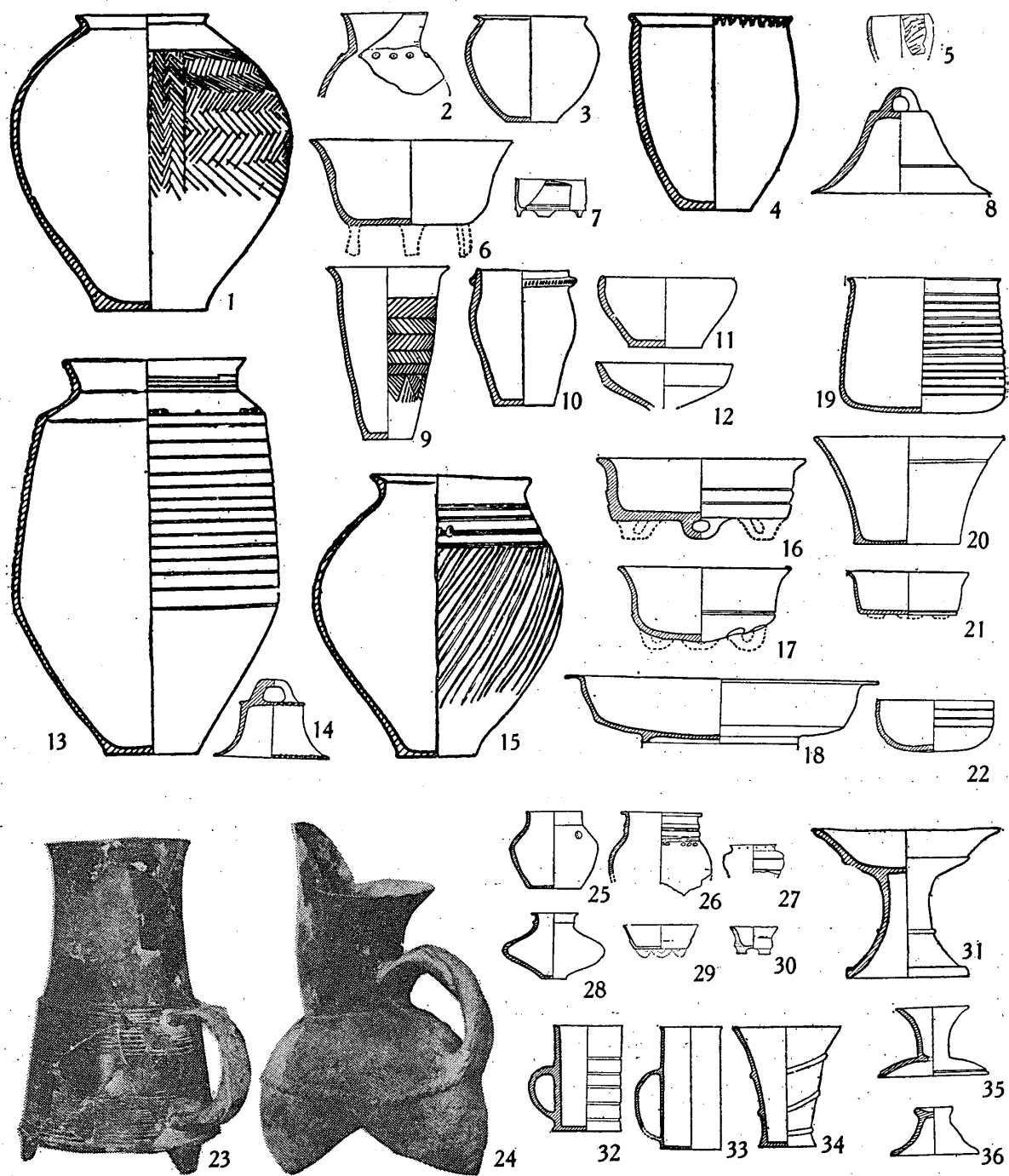


図6 蛎查崗（1～8），小珠山上層（9～12），南窖（13，14），上馬石中層（15～22），及び四平山（23，24），老鉄山（25～36），出土の土器（23，24を除き $\frac{1}{8}$ ）

れる。この時期には轆轤技術が発達し、糸切底が見られる(図4—5)のもこの様な関係を反映していよう。二重口縁端に断続的に刻みを施すもの(図4—2)は合同調査時の報告には無く後続する羊頭窪(図7—32)にある。しかし、積石塚資料中に他に羊頭窪に共通するものが無い。又、本研究室所蔵の大台山遺跡出土資料は比較的纏まっているが、これは森修が報告した資料(文87)と異なり、双砦子2期段階が大部分を占めている。その中にも見られるので、この時期のものと考えておく。長頸壺(図4—1)は単砦子一号墓(図7—16)でも伴出している。

この頃の中部の代表的な遺跡として、小珠山(文44)、単砦子(文84)がある。小珠山では上層がこの時期に相当する。小珠山上層期には他に上馬石中層、蛎查崗、洪子東が含まれる(文44)。独特な「附加堆紋」などから郭家村上層に並行する。

単砦子には前述した双砦子2期と同時期の1号墓の他に、2号墓と包含層出土の土器群がある(図6—1~23)。包含層では彩絵陶を伴出している。他に、内傾する頸部に並行条線を施す土器が特徴的である。この包含層と同様の在り方は高麗城貝塚(文87:挿図13)でも認められている。「共和国」の研究者により、彩絵陶を介して双砦子1期に対比されている(文58)。

口縁部に刻線を施した隆帯を持つ土器(図7—10)は蛎查崗(文44:図16—12)、小珠山(同:図16—4)例に類似する。但し、刻み付二重口縁土器が皆この時期のものかは不明である。報文(文84:22~23)では高麗寨下層との類似を説き、より遅れると見做している。高麗寨下層に特徴的な口頸部に斜格子文を持つ土器(文84:図版23—4)と関連するのかもしれない。

ここで再び、郭家村上層と双砦子1期の関係が小珠山上層と単砦子包含層で問われることになる。両者の相違として、彩絵陶の有無の他、単砦子の土器が殆ど平行条線文乃至無文である点が注意される。両者に先行する段階では幾何学的な沈線文が盛行し、後続する段階では衰退する流れの中では小珠山上層の方が古い様相を示している。従って、許・蘇の見解を支持するかに思われるが、双砦子1期には幾何学的な沈線文を伴う(文61:그림12)から、単砦子包含層が本来の在り方を示しているのかと言う疑問が残る。

2号墓出土土器(図7—18~23)はこれらとはやや異なる。類例は高麗寨にある(図7—24~26)が、高麗寨では一号墓出土土器は含まず、別に隆起線を持つ土器(図7—27, 28)が伴うと思われる。従って、一号墓とは時期差と見做せよう。

「共和国」の研究者は2号墓も1号墓と共に双砦子2期の段階に置いている(文57, 58)。両者の長頸壺の類似や、単砦子の層序ではほぼ同じ深さにあり、より下層からも彩絵陶が出ていることから、今は一号墓に近い時期としておく。

(4)

ここで、前章で扱った時期と山東半島との関係について触れておく。

四平山積石塚は山東半島との対比を考える上で最も重要な遺跡である。同じ頃の積石塚としては他に老鉄山(文42, 81)、將軍山(文61)⁹⁾があるが、土器は必ずしも一致しない。郭家村上層と老

極東先史土器の一考察

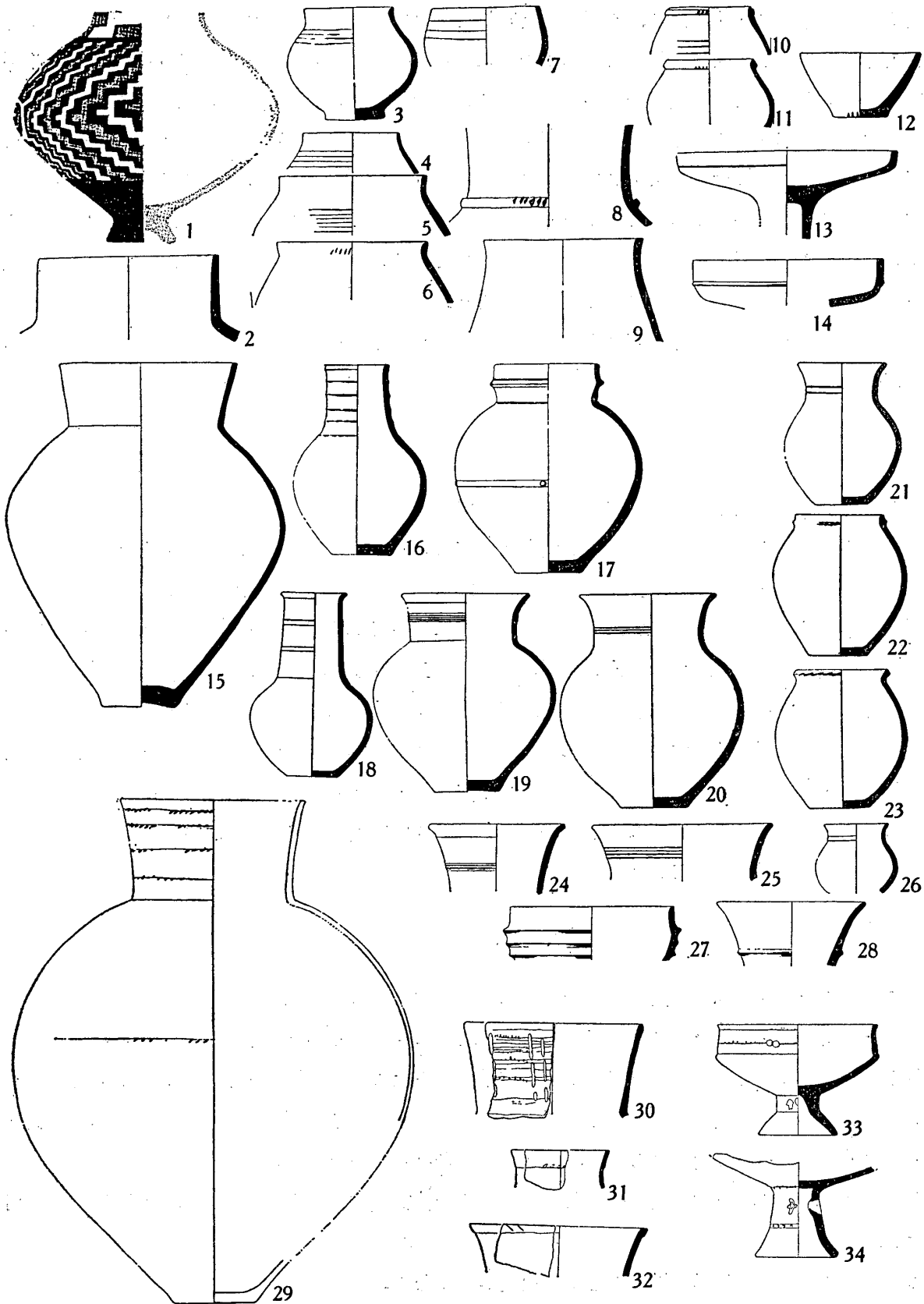


図7 単砵子遺跡包含層(1~14), 1号墓(15~17), 2号墓(18~23), 高麗寨(24~28), 羊頭窪(29~34)(1/8)

鉄山は集落と墓地の関係にあり、四平山も同時期とされている(文5)が、郭家村、四平山共に詳細を欠くので検討しえない。従って、四平山には山東竜山文化そのものと言ってよい土器があるが、逆にその遼東半島での位置が今一つ明らかでない。大よそ郭家村上層期段階として捉えておく。

四平山の三足杯(図6—23)は呈子3期のM11例(図2—35)、東海峪上文化層のM318例(文17: 図版陸—6)に類似する。呈子M11例がM15の三足杯(図2—18)に関連するとすれば、前述した如く3期でも古い様相を示すことになる。又、高・邵(文12)は四平山の鬻(ⅡB型)(図6—23)を呈子3期の鬻(図6—21, 31)に先行させている。以上から、四平山は山東竜山文化の呈子M15前後で末期には下らない段階に対比されよう。

山東半島で竜山文化に続く岳石文化の土器と双砫子2期や単砫子1号墓の土器はよく類似しており、広い分布を示している。

(5)

次に郭家村上層、双砫子1期以前の段階について見る。

遼東半島に於ける新石器文化の最古の段階は戦前より知られていた長山列島の沙泡子を代表とする(文86, 87)。連続弧線文が特徴的である。小珠山下層にその良好な資料がある(図8—1~7)。遼東半島西部では未だ知られていない。以降の時期については郭家村貝塚の層位が明らかにしている(文5)。上層(1, 2層)の下に下層の3, 4, 5層がある。5層は小珠山中層(図8—20~27)と同時期である。小珠山中層の彩陶は山東半島東端の紫荆山下層、丘家庄と同様であり、これを介して大汶口3期に並行する(文44)。4層は呉家村(文44, 86)(図8—8~19)、文家屯(文65)と同時期である。三足觚形杯(図8—19)や鬻(図8—16)から、高広仁編年(文11)の大汶口4期(嚴文明編年では5期)に並行する(文44)。3層は上層との移行期とするが、実体は不明。この間は良い資料に恵まれていない。

(6)

次に、双砫子3期以降の前期青銅器時代⁶⁾について検討する。

双砫子3期(図9)はほぼ羊頭窪(図7—29~34)に相当するが一部羊頭窪には見られない要素がある。羊頭窪は殆ど点線と平行線及び棒状貼付文からなる単純な様相を示しているのに対し、双砫子3期の幾何学的な文様(図9—4~8, 11)は後続する牧羊城下層(図10—1~7)、高麗寨下層(図10—20~30)に近似する。中部ではこの段階は明らかでない。

次段階は西部では牧羊城(文83)下層、中部では高麗寨(文84)下層、上馬石(文44)上層が相当する。

この段階には再び幾何学的構成をとる沈線文が多くなる。

図12—9~12は本研究室所蔵の牧羊城出土土器の一部である。9の点列文からなる文様は上馬石上層(文44: 図31—1, 2)に類似し、羊頭窪(文11: 図二七—1など)、双砫子3期(図8—1)に

極東先史土器の一考察

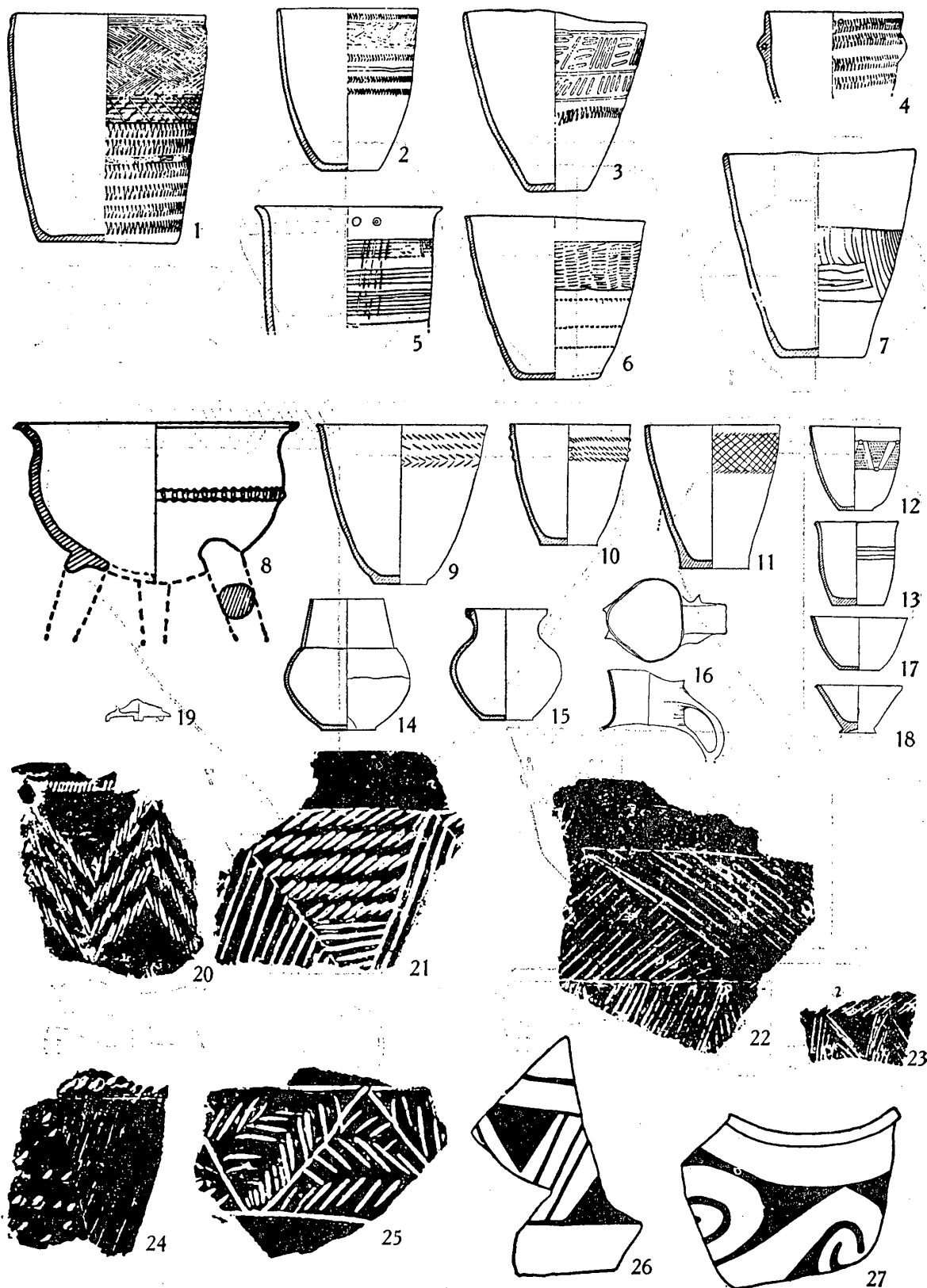


図8 小珠山下層(1~7), 中層(20~27), 呉家村(8~19)出土の土器 (1~18は $\frac{1}{8}$, 20~27は $\frac{2}{5}$)

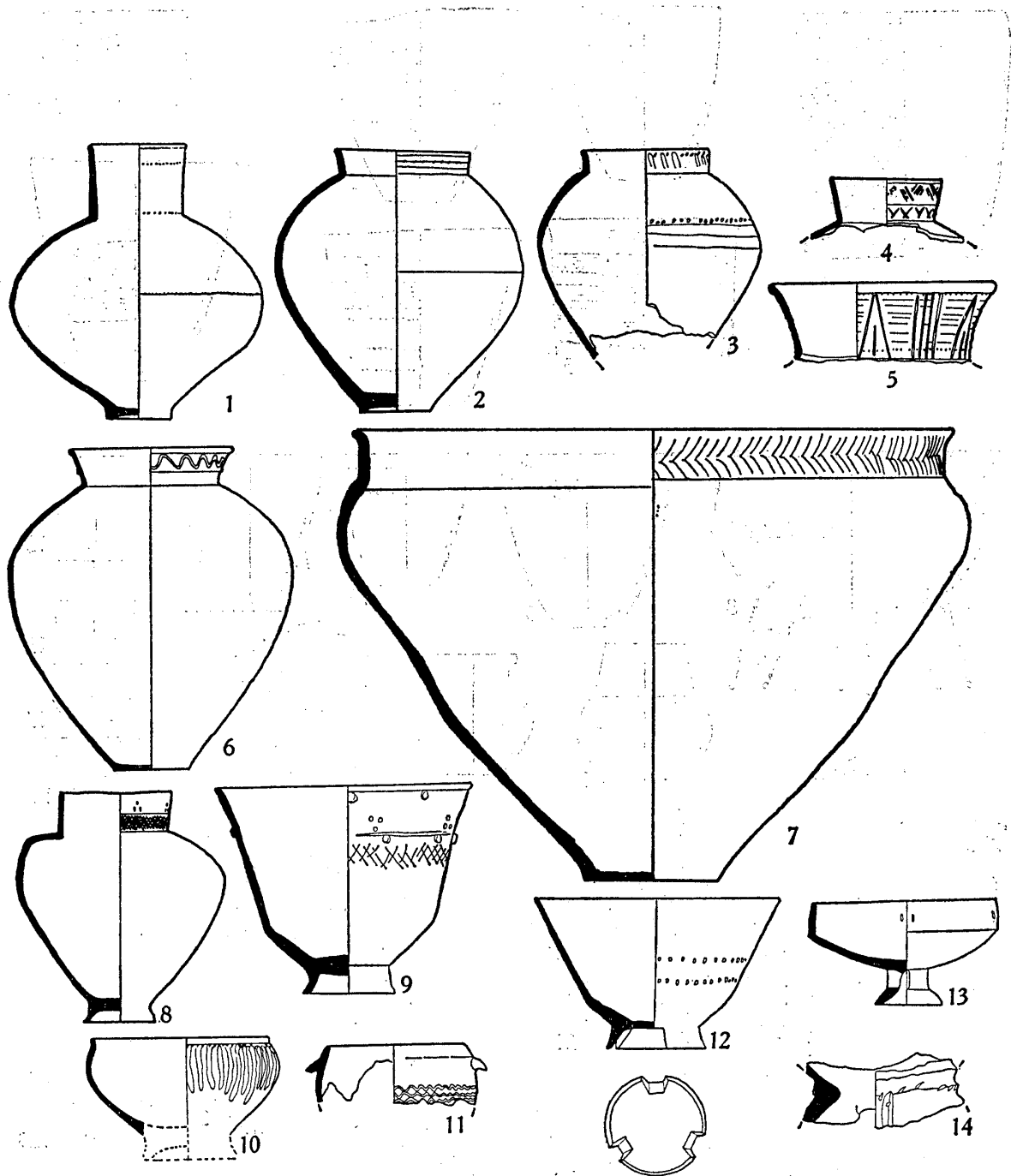


図9 双砦子遺跡第3文化層出土の土器 (1/6)

極東先史土器の一考察

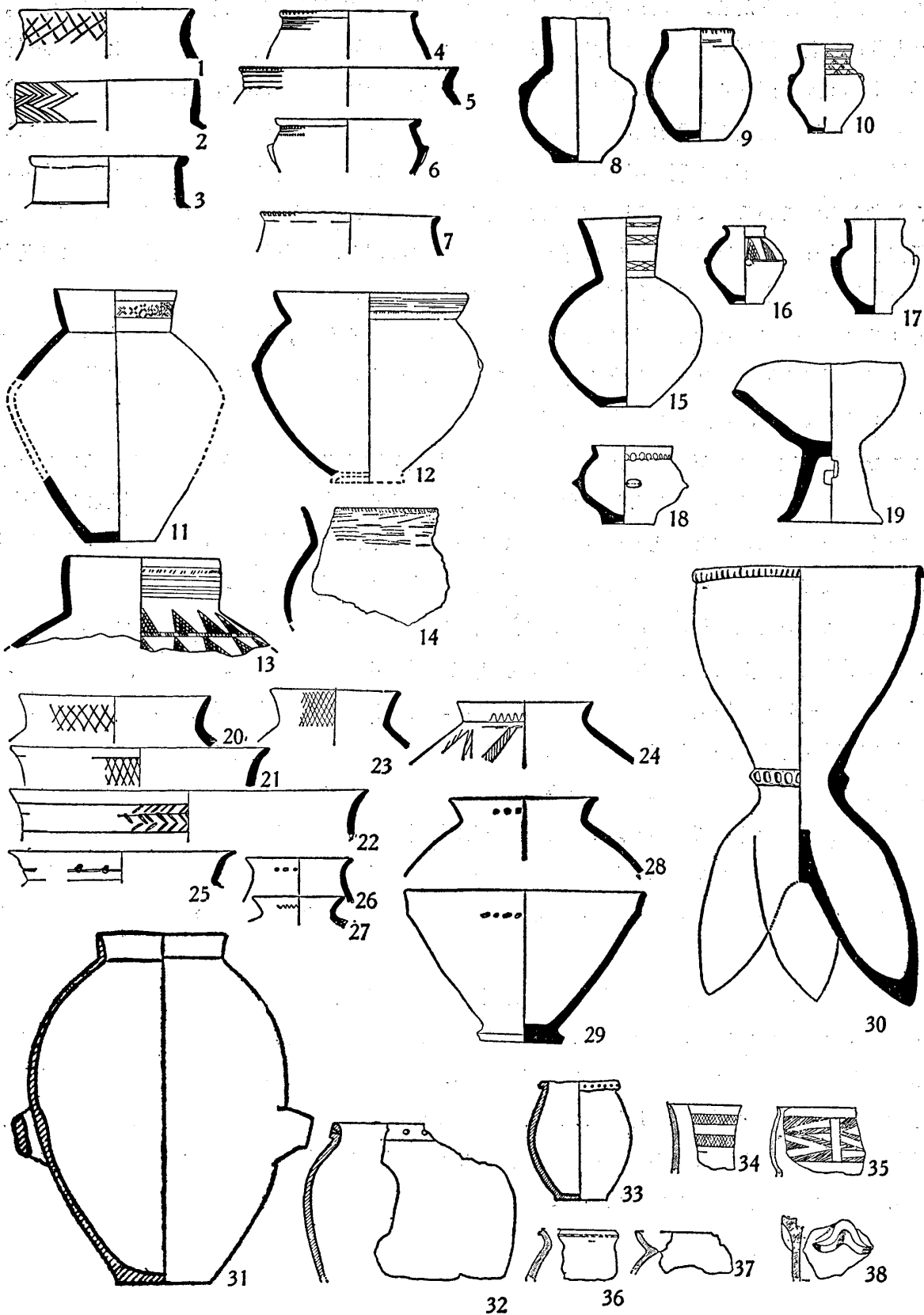


図10 牧羊城下層(1~7), 尹家村下層1期(11~14), 桜上墓(8~10), 岡土墓(15~19), 高麗寨下層(20~30), 上馬石上層(31~38)出土の土器(1/8)

もあるが、器形は異なる。口縁が内湾する器形は西北朝鮮の美松里型土器（図12—33）に通じる。これと共に、美松里型土器の特徴（図12—33, 34）である口唇形把手類似例（図4—12）及び横橋把手（文83：24）があることも注意しなければならない。更に、青銅剣を伴う楼上墓（文41, 61）（図10—8～10）、同段階とされる尹家村（文61）下層1期（図10—11～14）の土器にも類似している。楼上墓、尹家村下層1期は同じく遼寧式銅剣を出した崗上墓（文61）（図10—15～19）より遅れると考えられている（文48, 55, 58, 67）。その根拠としては青銅剣自体の編年の他に「共和国」の研究者（文55, 58）は崗上墓には口唇形把手があるのに対し、楼上墓、尹家村下層1期にはそれが認められないことから、より後出の土器型式であるとした。

それでは図4—11, 12の土器⁷⁾はどの様に解釈すべきであろうか。把手を除けば楼上墓（図10—9）、尹家村下層1期（図10—14）とよく類似する。又、楼上墓出土土器（図10—10）は牧羊城下層（文83：図版23—9, 10, 24）にも類例がある。

ここで、先に秋山進午が楼上墓出土の銅鑿の施文と牧羊城址出土の銅斧鑄型に見られる施文とが同一であると指摘している（文67）のを想起すべきであろう。楼上墓、尹家村下層期と牧羊城下層の少なく共一部が同時期と考えるべきではなからうか。但し、牧羊城下層は明らかに羊頭窪、双砵子3期と接続的であるから、全てを崗上墓に後続させるには無理があろう。

この問題については中部の高麗寨下層、上馬石上層が参考になる。上馬石上層には口唇状把手に類似する「鞍状横耳」（図10—38）があり、牧羊城例（図4—12）に近い。又、横橋把手もある。長頸壺（図10—34）は崗上墓（図10—15）に通じる。南山裡出土の長頸壺（文72：図版2—2, 4）が両者の親近性を明らかにしてくれる。又、三角形区画内に斜格子を充填する文様（文44：図三一—6）は崗上墓（図10—16）にある。中部地域では遼寧式銅剣に伴った土器は明らかでないが、今これら三者の関係を考えてみよう。これらは相互に共通する要素と相違する要素がある。又、三者共先行する双砵子3期と連続的な部分がある。一方、牧羊城下層の中、楼上墓に類似するとした土器は高麗寨、上馬石には報じられていない。地域差を無視すればより新しい様相を含むことになる。

この様に、牧羊城下層、高麗寨下層、上馬石上層と青銅剣を伴出する崗上墓、楼上墓との間には複雑な問題が残されている。しかし、ここでは諸氏の青銅剣の分析とは別に、青銅剣出現期の背景として土器も看過しえないことを示せば充分である。即ち、遼寧式銅剣を伴出するか或いは並行すると考えられているより東方の地域では平行条線文か或いは無文が主体となる美松里型や西団山子型が分布するのに対し、この地域では幾何学的文様が顕著な地域的特性を示しており、先行する段階と切り離しては考えられないのである。

(7)

瀋陽周辺では新楽下層が最も古く、次いで偏堡、新楽上層の順になっている（文45）。

新楽下層（文25）（図11—1～5）には連続弧線文が盛行し、紅山文化及び小珠山下層と関連する。

極東先史土器の一考察

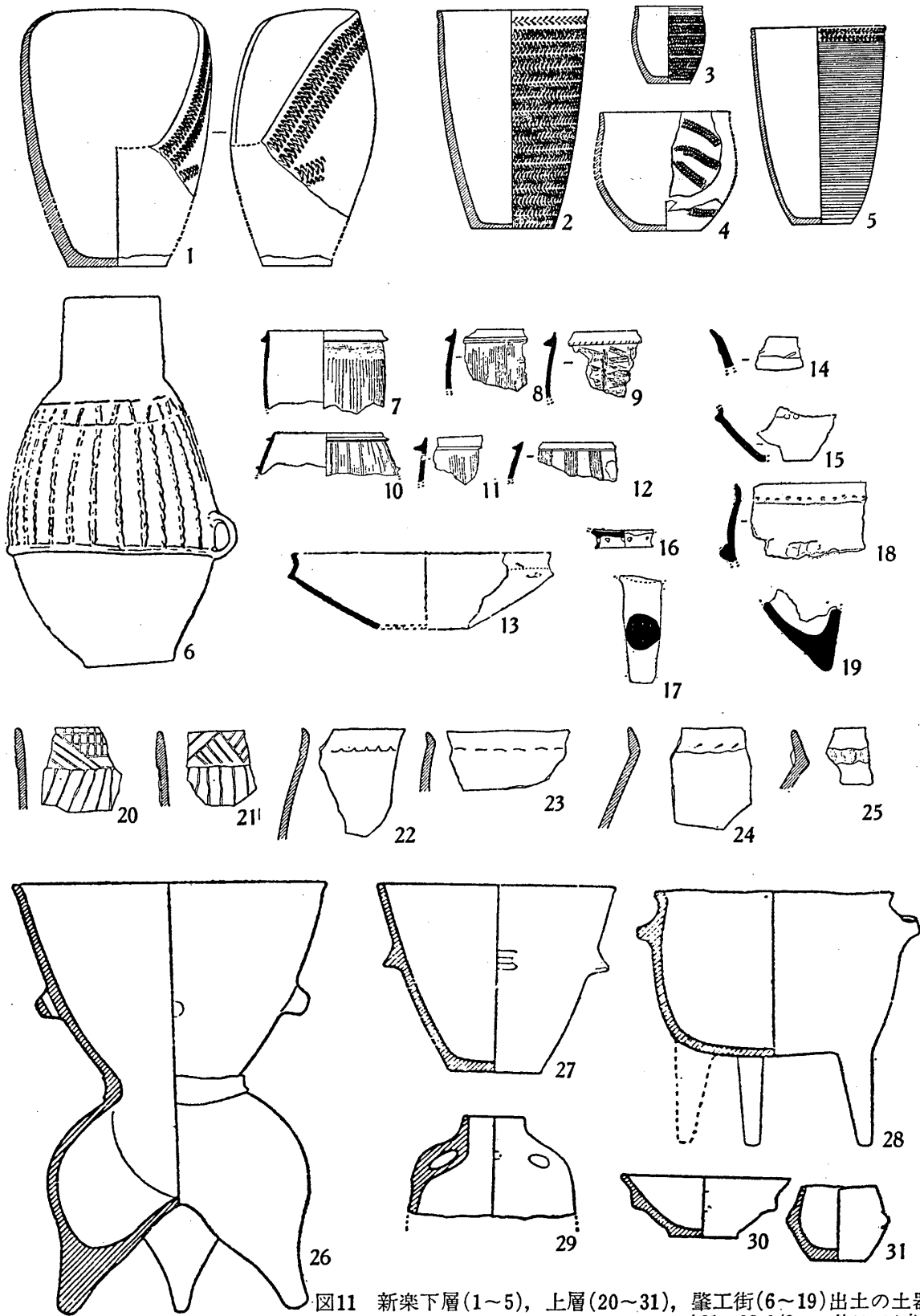


図11 新楽下層(1~5), 上層(20~31), 肇工街(6~19)出土の土器
(21~26 1/3 他は 1/8)

紅山文化には四稜山（文43）と三道湾子（文43）を代表とする二群があり、時期差が考慮されている（文45）。新楽下層の斜口縁の土器（図11—1）はこの中四稜山（文43：図25）と共通する。四稜山も仰詔文化との類似点が指摘されている（文43）から、磁山、裴李崗文化より遅れると考えられる。又、富河溝門類型が紅山類型より層位的に新しいと言う所見（文39）もあり、連続弧線文土器は或る程度の時間幅を有すことになるので一概に比定できないが、四稜山との類似から新楽下層、更には小珠山下層も大汶口3期をそれほど逆上ることはなかろう。

新楽下層の後はかなり空白があり、遼河流域の小河沿文化や遼東半島の郭家村下層に相当する時期が瀋陽周辺では不明である。

後続する偏堡類型は実体が良く分かっていないがこの時期の土器は胴部に縦走する隆線が特徴的である。偏堡遺跡（文32）の他、肇工街下層（文61）（図11—6～19）にもある。ここでは二重口縁で胴部に櫛歯状条線を持つものが多い。鬲或いは甗の袋状足を伴なう。鬲或いは甗は遼西では唐山市大城山（文6）を介して山東竜山最末期の尚庄3期に対比される豊下遺跡下層の夏家店下層文化前期には無く、より上層の中期以後に現われる（文35）。遼東半島では双砬子2期以降に現われる。夏家店下層中期と双砬子2期はほぼ同時期と考えられるので、「共和国」の研究者の指摘（文58）の如く、双砬子2期頃を上限としよう。図10—14の二重口縁も双砬子2期の例（図4—2）に類似する。櫛歯状条線文は遼東半島では双砬子1期、小珠山上層などにあり、双砬子2期には見られなくなるが、地域差を考えておく。

新楽上層でも主体となる殷周期の上層とは別の類型とされる一群がある（文25）（図11—20～25）。新楽の二重口縁は肇工街下層とは異なり、遼東半島での推移を参考にすればより新しい様相を示していることになろう。他に、やや肥厚する口縁部に複雑な沈線文を施す独特の土器（図11—20, 21）がある。胴部には縦位の隆線が施される。

これらの隆線文と双砬子3期、羊頭窪の棒状貼付文が関連するのかは不詳である。

（8）

西北朝鮮ではおよそ次の様に編年されている（文57）。美松里下層、堂山—新岩里1—双鶴里2—新岩里2（表—1）。

美松里下層（文51：그림 5）は断片的資料であるが連続弧線文土器が知られている。嘗つて、佐藤達夫（文74）はこれを西北朝鮮有文土器の最古の段階に措定した。小珠山下層や新楽下層から見ても、やはり現在知られる最古の段階と見做される。「共和国」の研究者（文54, 57）は新石器時代後半に比定しているが、これは上馬石具塚の層位認識に誤解があったものと思われる。連続弧線文土器はより南の細竹里遺跡（文50）にも知られている。

堂山（文63）（図12—1～3）は以前より呉家村との関連が指摘されている（文54）。従って、堂山も大汶口5期に近い時期と見做される。遼東半島ではこの間に小珠山中層が入る。西北朝鮮では分布が確認されていないが、清江以南に分布する弓山類型（文57）の一部がこの間に相当しよう。

極東先史土器の一考察

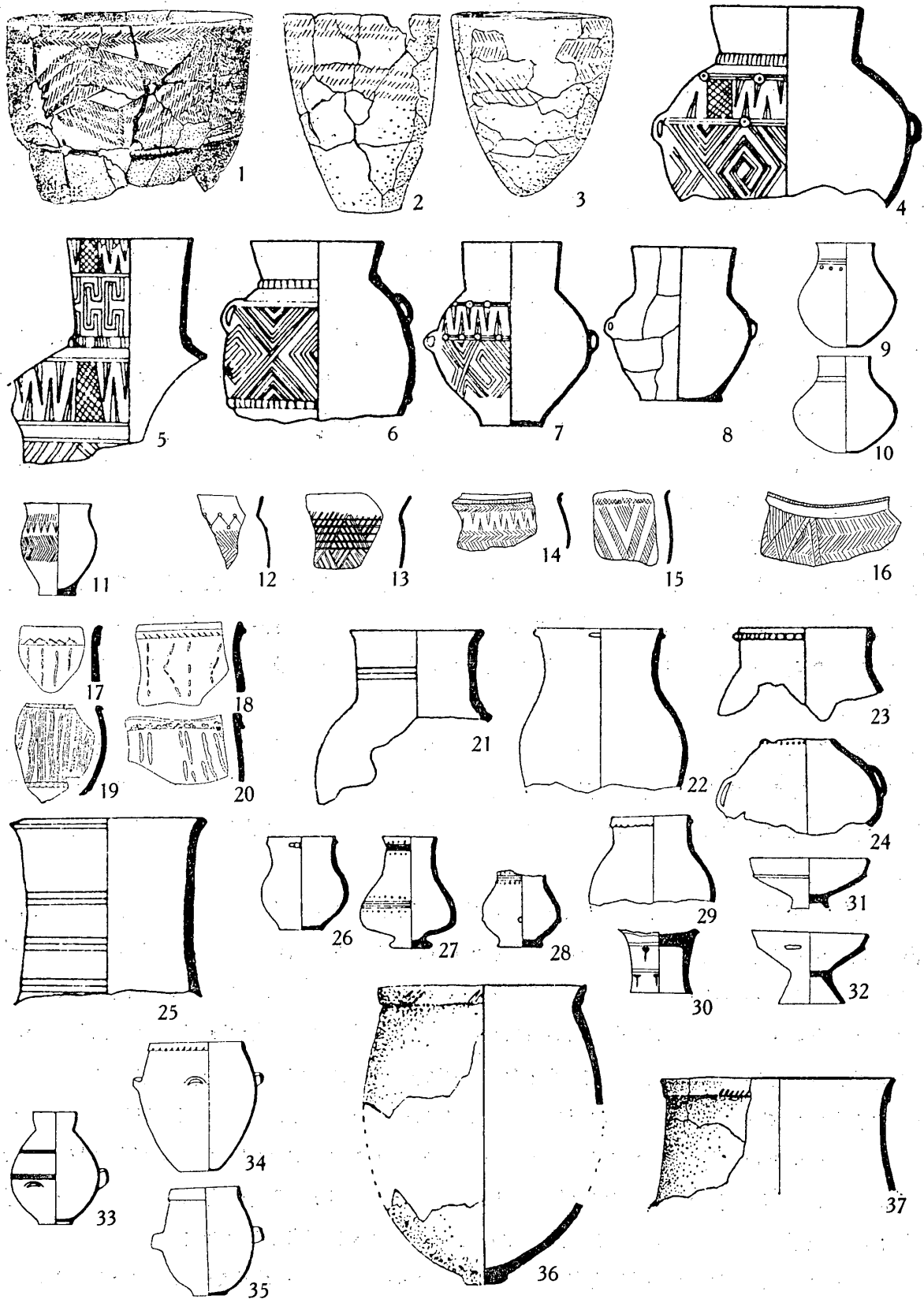


図12 堂山(1~3, 17, 18), 新岩里第1文化層(4~15), 第2文化層(21~32), 第3文化層(33~35), 双鶴里(16, 19, 20), 金灘里(36, 37)出土の土器(1/8)

小珠山中層に見られる縦位と横位の綾杉からなる文様(図7—23)は弓山類型に独特なものであり、その関連は否定できない。従って、現在では4期に分けられている弓山類型⁹⁾中、一部は大汶口3期に並行することになるろう。

新岩里1期(文65)(図12—4~15)は「共和国」の時代区分では新石器時代終末であり、有文(=櫛目文)、無文土器時代に分ける場合には無文土器時代初期に位置付けられる(文73)。これは区分の基準の相違によるものでここでは問わない。

新岩里1期には双砬子1期や単砬子包含層に近い土器(図12—9, 10)がある。同時期の双鶴里1期の土器(図12—16)の胴部文様を縦に分割する手法は、小珠山上層期の蛎査崗出土例(図6—1)と同様である。「共和国」の研究者は新岩里1期と双砬子1期は類似するが、新岩里遺跡では別地点の第3地点第1文化層から彩絵陶が出ているのに対し、新岩里1期の層には伴わないことから双砬子1期とほぼ同時期であるか、やや先行すると考えている(文58)。

別に、黒竜江省の望海屯(文28)第一文化層を新岩里1期に関連させて前二千年紀前半に置いている(文59:184)。望海屯出土土器は最近白金宝類型と呼ばれ西周頃に対比されている(文14)ので、時期を異にする。

新岩里1期と2期の間に、偏堡類型に並行する段階として双鶴里2期が設定されている(文58)。

双鶴里、堂山遺跡より各遺跡の主体となる時期の遺物とは別に少量報じられている(文52)が、実体は不明の点が多い。二重口縁、胴部文様としての縦位の隆線、櫛歯状条線文を特徴とする(図12—17~20)。

新岩里1期には雷文や綾杉文など先行する堂山と共通する要素があるのに対し、双鶴里2期には見られない。二重口縁上のX字状沈線文は郭家村上層期(文81:第18図, 第19図)にあり、この時期の大藩家屯には縦位の隆線文(同:第19図80)がある。これは新岩里1期が郭家村上層に先行することを示唆する。

ここで再び整理してみると、遼東半島には近接した時期に郭家村上層—小珠山上層の一群と、双砬子1期—単砬子包含層の一群がある。西北朝鮮の状況は遼東半島の両群に関する「共和国」側の見解を支持している様に見える。しかしながら、各地の資料は断片的であって、今後の資料を待つべきであろう。何れにしろ新岩里1期が山東竜山文化より降らない時期であることは動かない。

新岩里2期(図12—21~32)は双砬子3期、羊頭窪に対比されている(文58)。平行条線と点列を配合する文様や脚部(同一30)の特徴から見て首肯しうる所である。但し、新岩里遺跡第3地点第1文化層から出ている棒状貼付文(文56:그림13—5)(文73:第4図21)は羊頭窪に特徴的であり、より上層の第2文化層(新岩里2期)には無いから羊頭窪・双砬子3期より多少遅れると考えられる。単砬子2号墓の土器(図7—18~23)とも類似するが両者の関係は不明。

ここからは前二千年紀後半期に比定される(文57:88)青銅刀子が出ている(文56, 60)。撫順の遺跡(文34)や、新樂上層(文25)にもあり、遼寧式銅劍出現以前の青銅製品の在り方を示しているよう。又、双砬子3期、羊頭窪の年代を逆に補強してくれる。

美松里上層(文51, 73)は遼寧式銅剣を伴う時期である(文55, 58)。最近の資料(文24, 47)もこれを支持している。新岩里2期と美松里上層の間には多少の空白がある。

(9)

ここで、西朝鮮の所謂コマ形土器(文73)の上限年代に関して若干触れておく。

平壤市清湖里遺跡(文70)から双鶴里2期相当の隆起線を持つ土器(同:第5図, 第9図)が出ている。同じ平壤市金灘里遺跡(文53)第2文化層はほぼ同様の組成を示すが、隆起線文は含まず少量別の一群(文53:그림14)を含む。これらが各々に共伴して時期差を反映していると思えるべきか明らかではない。しかし、金灘里第2文化層は新岩里1期に並行する可能性も示唆されている(文54)から、清湖里の在り方も無視しえない。たとえ清湖里は混在としても、コマ形土器の最古の段階とされる金灘里第3文化層(文57)には伴わない。細竹里遺跡(文50)の所見(文52)により、コマ形土器は少なくとも新岩里2期迄は遡及するが、双鶴里2期より遅れることになり、「共和国」の見解(表一1参照)と一致する。

(10)

朝鮮コマ形土器に関連して、周辺地域の二重口縁土器を概括しておく。

遼東半島では郭家村上層、双砬子1期、小珠山上層などが古い段階である。郭家村上層を例にすれば、刻み列の他に種々の沈線文が施される。以後、双砬子2, 3期、羊頭窪などでは刻み列を連続或いは非連続に施すものが殆どになる。斜線を施す例は羊頭窪にある(図7—32)が少ない。二重口縁自体扁平化する。瀋陽周辺では肇工街下層、新楽に同様の推移を見る。西北朝鮮では新岩里1にもあると述べられている(文65)が不詳。新岩里2期には連続して刻み目を施すものがある。他に口縁部に隆帯を連続、非連続に施すものや、更に鶏冠状になるものが注意されている(文56)。細竹里Ⅱ第1文化層(文50, 82)にもある。これを「共和国」の研究者(文58)は郭家村上層や大藩家屯と対比している。確かによく類似するが、時期的には符合しない。撫順周辺の殷周期とされる順山屯(文40)で「附加堆紋」が盛行するので、これと関連した現象ではないかと思われる。

以上の変遷の中で、コマ形土器最古の段階とされる金灘里第3文化層は双砬子2, 3期、羊頭窪と最も近いことになろう。

(11)

以上で論及した諸地域の関連を示すならば大よそ表一4の如くになろう。これは「共和国」側の見解である表一1と大差ない。未だ種々の問題があるが、重要なのは西北朝鮮の無文時代初頭が山東竜山文化以降には下らず、前二千年前後とする「共和国」研究者の見解が中国中原との対比からも動かし難いことである。又、西北朝鮮で現在知られている有文土器の上限は磁山、裴李崗期迄遡るかは不明だが、大汶口3期以前に遡るのは明らかである⁹⁾。この様な年代観は東北朝鮮の有文土

表一4

河 南	山 東	遼東半島 西部	遼東半島 中部	西 北 朝 鮮	瀋 陽 周 辺
磁山・裴李崗					
庙底溝1(古) (新) 秦王寨 厘底溝2 河南竜山 二里头 二里崗 小 屯	1		?	?	?
	2		↑	↑	↑
	3	郭家村下層	小珠山下層	美松里下層	新樂下層
	4	5	小珠山中層		
	5	4		吳家村	(?)
	6	文家屯		堂 山	↑
	7				弓 山 類 型
	8	3?			↓
山東 前 竜山 中 岳石 後		(郭家村上層 四平山 双砬子 1)	(小珠山上層 单砬子包含層)	新岩里 1	
岳石		双砬子 2	单砬子 M1	双鶴里 2	肇工街下層
		双砬子 3 羊頭窪 牧羊城下層	上馬石上層 (高麗寨下層)	新岩里 2	新樂上層

器にも連動し、密接な関係にある中国東北地方東部、沿海州の新石器時代についても、従来のシベリアとの対比を重視した立場とは別に再検討を促すのである¹⁰⁾。(1982年2月3日稿了)

本研究室所蔵資料の利用に際しては上野佳也先生の御配慮を賜った。澄田正一先生には未発表資料の閲覧を御許しいただき、種々御教示を賜った。三宅俊成先生にも種々御教示を賜った。千葉基次、鄭漢徳両氏からも御助力を賜った。又、各地資料の実見に際し、宇野隆夫、岡内三真、高浜秀、早乙女雅博、谷豊信各氏に便宜をはかっていただいた。以上、記して感謝いたします。

註

- この呼称は定着していないが、ここでは仮に岳石文化としておく。文献49を参照。
- 敵文明(文8)は1~4期を青蓮崗文化、5~8期を大汶口文化としているが、ここでは全期を大汶口文化としておく。
- 或いは岳石文化期の混在かもしれないが、他に共通するものが無い。但し、両城鎮は竜山最末期の単純遺跡ではなく、より古い時期も含むのかもしれない。
- 彩絵陶を出す遺跡の中、大連浜町貝塚(文77)は羊頭窪、牧羊城下層期の土器が出ているが混在と見るべきであろう。又、望海塢(文76)は最低限双砬子1、2期、牧羊城下層段階を含んでいるが、この中の双砬子1期段階に伴ったと考えられる。大台山(文88)については「共和国」の研究者によって、双砬子1、3期段階からなると考えられている(文58)。
- 文献7によれば將軍山積石塚より青銅器が出ているらしい。しかし伴出している土器の記載は羊頭窪の土器を想起させるので、ここで扱う積石塚とは異なる時期の積石塚と思われる。
- 遼東半島の青銅器時代の上限について、「共和国」の研究者は单砬子包含層出土の青銅片を根拠として双砬子2期を上限としている(文57:72)が、单砬子包含層は大よそ双砬子1期に並行するから混在と見做さざるを得ない。安志敏(文1)は双砬子3、羊頭窪を上限としている。周辺地域の状況から考えて、安志敏

極東先史土器の一考察

に従うべきであろう。

- 7) より良好な資料は『牧羊城』(文83)の図版23—13に示されている。
- 8) 智塔里を例とすれば、智塔里第Ⅰ地区1号住(弓山1期)、智塔里第Ⅱ地区2, 3号住(弓山2期)、第Ⅰ地区住居址外層(弓山3期)の順になっている。しかし、頸部に施される点列の鋸齒文は第Ⅰ地区の両者にあるが、第Ⅱ地区には見られず断絶を示すことになる。弓山類型の細別には未だ疑問の点があるのでここでは触れない。
- 9) 有文土器文化は北方との関連とは別に黄海を挟んで大汶口、竜山文化などと対峙した文化としての一側面を持っている。有文土器文化の農耕はこの様な視点からも捉えられるべきであろう。有文土器自体の上限も更に遡及する可能性がある。
- 10) 佐藤達夫は「東アジア先史土器の古さ」(文75)で朝鮮有文土器の上限年代を紀元前三千年紀とした。筆者も以前はこれに従っていたが、これは有文土器文化の下限を都宥浩(文62, 63)の如く前一千年紀に下とした場合に成立するのであり、理化学的年代とは別にほぼ歴年代に近い数値である紀元前二千年前後をその下限とした今では成立は難しい。又その論拠の一部となっていたシベリアについても、最近の研究動向から見て、ツェルネストフ編年は既に成立し難いし、沿バイカル編年を土器型式として重視するのも避けるべきであると考えている。これについては別途論じる予定である。

引用文献

- 1) 安志敏 1979 「略論我国の新石器時代文化的年代問題」 『大汶口文化討論文集』所収
- 2) 安志敏 1979 「略論三十年来我国的新石器時代考古」 『考古』1979—5
- 3) 尹達 1955 『新石器時代』
- 4) 煙台市博物館(李游) 1963 「山東煙台市郊丘家庄發現新石器時代遺址」 『考古』1963—7
- 5) 許玉林・蘇小幸 1980 「略談郭家村新石器時代遺址」 『遼寧大學學報』1980—1
- 6) 河北省文物管理委員會(陳惠, 唐雲明, 孫德海) 1959 「河北唐山市大城山遺址發掘報告」 『考古學報』1959—3
- 7) 許玉林・許明綱 1981 「遼東半島石棚綜述」 『遼寧大學學報』1981—1
- 8) 嚴文明 1980 「論青蓮崗文化和大汶口文化的關係」 『文物集刊』1所収
- 9) 嚴文明 1981 「竜山文化和竜山時代」 『文物』1981—6
- 10) 吳秉楠・高平 1978 「対姚官庄与青固堆兩類遺存的分析」 『考古』1978—6
- 11) 高広仁 1978 「試論大汶口的分期」 『考古學報』1978—4
- 12) 高広仁・邵望平 1981 「史前陶鬻初論」 『考古學報』1981—4
- 13) 国立中央研究院歴史語言研究所 1934 『城子崖』 中国考古報告集之一
- 14) 黒竜江省文物工作隊(林秀貞, 郝思德) 1980 「黒竜江肇源白金宝遺址第一次發掘」 『考古』1980—4
- 15) 山東省博物館 1963 「山東濰坊姚官庄遺址發掘簡報」 『考古』1963—7
- 16) 山東省博物館 1973 「山東蓬萊紫荆山遺址試掘簡報」 『考古』1973—1
- 17) 山東省博物館・日照県文化館東海峪發掘小組 1976 「1975年東海峪遺址的發掘」 『考古』1976—6
- 18) 山東省博物館・聊城地区文化局・茌平県文化館 1978 「山東茌平県尚庄遺址第一次發掘簡報」 『文物』1978—4
- 19) 山東省文物管理处 1960 「山東日照兩城鎮遺址勘察紀要」 『考古』1960—9
- 20) 山東大學歴史系考古專業 1980 「山東泗水尹家城第一次發掘」 『考古』1980—1
- 21) 商丘地区文物管理委員會・中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊 1978 「河南永城王油坊遺址發掘概況」 『考古』1978—1
- 22) 昌濰地区芸術館・考古研究所山東隊 1977 「山東胶県三里河遺址發掘簡報」 『考古』1977—4
- 23) 昌濰地区文物管理組・諸城県博物館 1980 「山東諸城呈子遺址發掘報告」 『考古學報』1980—3
- 24) 清原県文化局 1981 「遼寧清原県門臉石棺墓」 『考古』1981—2
- 25) 瀋陽市文物管理弁公室 1978 瀋陽新樂遺址試掘報告 『考古學報』1978—4
- 26) 鄒衡 1980 『夏商周考古論文集』
- 27) 蘇秉琦・殷璋璋 1981 「關於考古學文化的区系類型問題」 『文物』1981—5

小川 静夫

- 28) 丹化沙 1961 「黒竜江肇源望海屯新石器時代遺址」 『考古』1961—10
- 29) 中国科学院考古研究所山東発掘隊(何裔靄) 1962 「山東梁山青固堆發掘簡報」 『考古』1962—1
- 30) 中国社会科学院考古研究所山東発掘隊 1962 「山東平度東岳石村新石器時代遺址与戦国墓」 『考古』1962—10
- 31) 佟柱臣 1961 「東北原始文化的分布与分期」 『考古』1961—10
- 32) 東北博物館文物工作隊(王增新) 1958 遼寧新民縣偏堡沙崗新石器時代遺址調查記『考古通訊』1958—1
- 33) 通訊南京博物院 1962 「江蘇贛榆新石器時代至漢代遺址和墓葬」 『考古』1962—3
- 34) 撫順市博物館 1981 「遼寧撫順發現殷代青銅環首刀」 『考古』1981—2
- 35) 洛陽博物館 1975 「河南臨汝煤山遺址調查与試掘」 『考古』1975—5
- 36) 洛陽博物館 1978 「洛陽東馬溝二里頭類型墓葬」 『考古』1978—1
- 37) 李仰松 1980 「從河南龍山文化的幾個類型談夏文化的若干問題」 『中国考古学会第一次年會論文集』所収
- 38) 李経漢 1980 「試論夏家店下層文化的分期与類型」 『中国考古学会第一次年會論文集』所収
- 39) 劉観民・徐光冀 1980 「遼河流域新石器時代的考古發現与認識」 『中国考古学会第一次年會論文集』所収
- 40) 劉敦愿 1958 「日照兩城鎮龍山文化遺址調查」 『考古學報』1958—1
- 41) 旅順博物館 1960 「旅順口区後牧城駅戦国墓葬清理」 『考古』1960—8
- 42) 旅大市文物管理組 1978 「旅順老鉄山積石墓」 『考古』1978—2
- 43) 遼寧省博物館・昭烏達盟文物工作站・敖漢旗文化館 1977 「遼寧敖漢旗小河沿三種原始文化的發現」 『文物』1977—12
- 44) 遼寧省博物館・旅順博物館・長海縣文化館(許明綱, 許玉林, 蘇小幸, 劉俊勇, 王崑英) 1981 「長海縣広鹿島大長山島貝丘遺址」 『考古學報』1981—1
- 45) 遼寧省博物館文物工作隊 1979 「概述遼寧省考古新収獲」 『文物考古工作三十年』(関野雄監訳「中国考古学三十年」1981) 所収
- 46) 遼寧鉄嶺地区文物組 1981 「遼北地区原始文化遺址調查」 『考古』1981—2
- 47) 遼陽市文物管理所 1977 「遼陽二道河子石棺墓」 『考古』1977—5
- 48) 林澐 1980 「中国東北系銅劍初論」 『考古學報』1980—2
- 49) 黎家芳・高広仁 1979 「典型龍山文化的来源, 發展及社会性質初探」 『文物』1979—11
- 50) 金永裕 1964 「細竹里遺跡發掘中間報告(2)」 『考古民俗』1964—4
- 51) 金用珩 1963 「美松里洞窟遺跡發掘報告」 『各地遺跡整理報告』 考古学資料集第3集 所収
- 52) 金用珩 1964 「우리나라青銅器時代の年代論과關連한몇가지問題」 『考古民俗』1964—2
- 53) 金用珩 1964 『金灘里原始遺跡發掘報告』 遺跡發掘報告第10集
- 54) 金用珩 1966 「西北朝鮮빛살무늬그릇遺跡의年代論略論」 『考古民俗』1966—1
- 55) 金用珩・黃基德 1967 「紀元前千年紀前半期の古朝鮮文化」 『考古民俗』1967—2 (永島暉臣・西谷正訳「紀元前1000年紀前半期の古朝鮮文化」 『古代学』14卷—3, 4号 1968)
- 56) 金用珩・李順鎮 1966 「1965年度新岩里遺跡發掘報告」 『考古民俗』1966—3
- 57) 社会科学院考古学研究所 1977 『朝鮮考古学概要』
- 58) 社会科学院考古学研究所・歴史研究所 1969 「紀元前千年紀前半期の古朝鮮文化」 『考古民俗論文集』1 所収
- 59) 社会科学院歴史研究所 1979 『朝鮮全史』1
- 60) 新義州博物館 1967 「1966年度新岩里遺跡發掘簡略報告」 『考古民俗』1967—2
- 61) 朝中共同發掘隊 1966 『中国東北地方の遺跡發掘報告』
- 62) 都宥浩 1958 「朝鮮原始文化の年代推定을의 한試圖」 『文化遺産』1958—3
- 63) 都宥浩 1960 『朝鮮原始考古学』(李進濬・鄭漢德抄訳「朝鮮原始考古学」(一)~(五) 『考古学』研究』38, 43, 46~48 1963~1965
- 64) 都宥浩・金勇男 1964 「우리나라旧石器時代과이른新石器時代の年代論에對하혀」 『歴史科学』1964—4
- 65) 李順鎮 1965 「新岩里遺跡發掘中間報告」 『考古民俗』1965—3
- 66) 안병창 1962 「平北道博川郡寧辺郡의遺跡調查報告」 『文化遺産』1962—5

極東先史土器の一考察

- 67) 秋山進午 1968・1969 「中国東北地方の初期金属器文化の研究」 『考古学雑誌』53-4, 54-1, 4
68) 飯島武次 1978 「殷前期の提言(4) 陶器(1)」 『古代文化』30-7
69) 江上波夫・駒井和愛・水野清一 1934 「旅順双臺子山新石器時代遺跡」 『人類学雑誌』49-1
70) 笠原鳥丸 1936 「櫛目紋土器を発見せる北鮮清湖里遺跡」 『人類学雑誌』51-5
71) 金関丈夫・三宅宗悦・水野清一 1942 『羊頭窪』 東方考古学叢刊乙種第三冊
72) 関東局編纂 1943 『旅順博物館図録』
73) 後藤直 1971 「西朝鮮の『無文土器』について」 『考古学研究』17-4
74) 佐藤達夫 1963 「朝鮮有紋土器の変遷」 『考古学雑誌』48-3
75) 佐藤達夫 1973 「東アジア先史土器の古さ」 『日本の考古学』2 新装版付録（「日本の先史文化」所収）
76) 島田貞彦・森修 1942 「望海嶋」 『羊頭窪』附録第二
77) 島村孝三郎 1942 「大連浜町貝塚の記」 『羊頭窪』附録第三
78) 澄田正一 1948 『中国先史文化』
79) 澄田正一 1979 「遼東半島の先史遺跡」 『橿原考古学研究所論集』第四 所収
80) 関野雄編 1963 『世界考古学大系』第5巻 東アジアⅠ
81) 鳥居龍蔵 1910 『南満州調査報告』（「鳥居龍蔵全集」第十巻 1976 所収）
82) 西谷正 1977 「細竹里の土器をめぐる問題」 『考古論集-慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集』所収
83) 原田淑人・駒井和愛 1931 『牧羊城』 東方考古学叢刊第二冊
84) 浜田耕作 1929 『貔子窩』 東方考古学叢刊第一冊
85) 浜田耕作・水野清一 1938 『赤峰紅山後』 東方考古学叢刊甲種第六冊
86) 三宅俊成 1936 「長山列島先史時代の小調査」 『満州学報』4
87) 三宅俊成 1975 『東北アジア考古学の研究』
88) 森修 1927 「関東州旅順管内山頭村大台山遺跡」 『考古学雑誌』17-5

文献50~66の朝鮮語文献は本来全てハングル表記であるが、便宜上、漢字に直せるものについては漢字に直してある。

図出典文献

- 図1 文献8。
図2 文献23。
図3 文献30。
図4 文献61。
図5 1~22 文献44。23, 24 文献80。25~36 文献42。
図6 1 文献87より転載。2~28 文献84。29~34 文献71。
図7 文献44。
図8 文献61。
図9 1~7 文献83。8~19 文献61。20~30 文献84。31~38 文献44。
図10 6~19 文献61。他は文献25。
図11 1~3 文献63。4~11, 21~29, 31~35 文献73より転載。12~16 文献65。17~20 文献59。30 文献58。36, 37 文献53。
図12 東京大学考古学研究室所蔵。文献69, 83報告資料。